

---

EVOLUTION - 進化という名の暴走 -

謎の生物

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

EVOLUTION - 進化という名の暴走 -

### 【Nコード】

N9423X

### 【作者名】

謎の生物

### 【あらすじ】

10年前、母親を亡くして天道家に来て、俺、天道光の妹となつた可憐。しかし10年経つた今になってその母親が生きているというふざけた手紙によって、伊豆諸島の小島の1つに建てられている怪しげな研究所に行ってしまう可憐。

1週間近く何の音里も無い妹が心配になつて通っている高校の生徒会兼部の仲間の美少女3人と共にその研究所に行くが、そこで待っていたのは想像を絶する戦慄と恐怖そして命を掛けた戦いだつた。孤島に建っている怪しげな研究所を舞台にゾンビ、謎のモンスター

ー達を相手にしながら妹を探し出して脱出を目指すサバイバルホラ  
ーアクションモノです。

## ファイル1 事件の発端 (前書き)

というわけでバイオっぽい内容の物語です。といってもそこまですごくできたモノでもないなので気楽に読んでください。

## ファイル1 事件の発端

その日は今でも鮮明に覚えている。10年前の暑い夏の日だった。俺、天道光てんどうひかるの前に突然、目の前に現れた女の子。

異民族の血が混じっていると思われる亜麻色の髪をなびかせて俺を見る。

俺を見つめ、「なんさいなの？」と尋ねた。それが俺とこの女の子との最初に交わした言葉だった。

「よろしくね。おにいちゃん。」

そして彼女、可憐かれんは天道可憐てんどうかれんとなり俺の妹となった。

何でもすでに父親はおらず、たった1人の肉親である母親も不慮の事故で亡くし、1人になってしまった。

俺や俺の親父は遠い親戚にあたり、他に身寄りのない可憐は、この天道家に引き取られてきたのだ。

正直、最初は戸惑いもある上に、見た目もかなり可愛かったので照れくささもあった。

ひよつとしたらそれに、親父が自分だけのモノでなくなる不安もあったかもしれない。

だが、そんな些細な不安も月日の流れと共に打ち消されていき、寧ろ可愛い妹が出来てちよつと幸せを感じる事もたまにあった。

それから10年後の今、現在、すでに俺の親父も3年前に可憐の母親の元に行ってしまった、それからは兄妹2人で過ごしている。

幸いにも親父は、結構な金と家を遺産として残してくれたので生活に困る事はなく、俺達は2人とも同じ高校に入学し、可憐は2年俺は3年となつて1学期がつい2日ほど前に終わった。

正直に言おう。俺はこの高校3年最後の夏は何か起きないかと期

待している。特に恋愛面で・・・。

俺は今現在の高校に入って結構のほほんと過ごしてきたが、何の因果か1年の後半に生徒会に入る破目になったのだが、それが縁で今は卒業して地元の大学に通っているクールビューティーな感じの先輩である生徒会長や、いささか無口でちよつと何考えているか分らないところはあるが、見た目はいい後輩と知り合えた。

それに俺と可憐、特に俺にとっては10年以上の付き合いがあるいわゆる幼馴染みと言う女友達がいる。天然系で些か頭は弱いが見はいい。それに妹の可憐

そんなわけでクラスメイトなどからは「リア充死ね」なんて言われているが、この中の誰かとロマンスになっていれば、それも当てはまるが生憎と誰ともそんな関係になっていない。

故にこの夏はこの仲の誰かと、理想的には全員と付き合い合えば最高なのだが、それはとても難しいので誰か1人でもいいので、今以上の関係になれないかと期待している。

しかしそれも妹の可憐の問題が片付いてからだろう。

「それでは行って来ます。お兄ちゃん」

「・・・ああ、気をつけて。用件は知らないけれども、片付くようならばさっさと片付けて帰って来いよ。」

「・・・うん」

3週間ぐらい前に可憐に手紙が来てから、何か可憐の様子が可笑しいのは気付いていたので尋ねてみたが、詳しい詳細は話してくれなかった。それにはちよつとショックだったが、ただ手紙の送り主は可憐に用があり指定する日時に、指定する場所に来て欲しいとの事だった。

そして今日、可憐はその用件のために出掛けて行ったというわけである。といつても場所は結構遠いらしくすぐに行って帰ってこられるようなところではなく、3、4日は掛かるらしい。

まあ逆に言えば4日ぐらいで帰ってくる様なのでそんなに気にすることではないだろうとこの時は思った。

しかし後々になって考えるとこの時、俺はどうして可憐に詳しく手紙の詳細を聞かなかったのかと後悔する事になった。そして同時に、これがこれから始まる圧倒的な戦慄と恐怖、そして命を掛けた戦いへの発端だったのである。

## ファイル1 事件の発端 (後書き)

というわけで第1話です。これからまあこんな感じで物語を進めていこうと思います。

ファイル2 今はまだ朝の日常。(前書き)

というわけで第2話です。内容的にはまだプロローグの続きの1幕といった感じの内容です。ほとんど進んでいないな。

## ファイル2 今はまだ朝の日常。

可憐が謎の用事で出て行ってすでに6日が過ぎた。明日で1週間になる。その間何の音沙汰もなし。一体どうなっついていやがる。

というか何で6日も掛かっているんだ。3〜4日で帰ってくるのではなかったのか。可憐の携帯に電話をしても電源を切っているらしく繋がらない、当然メールも駄目。そもそも可憐が何処に行ったのかも分らないではどうしようもない。

くそっ、何処に行くかぐらい訊いておけばよかった。こつ何の音沙汰もなしではどうしても心配になってくる。

俺はそんな不安を抱えながら、朝からあれこれ考えていると家のチャイムがピンポンとなった。そういえば今日は登校日だった。

ああ、可憐、お前とうとう登校日に間に合わなかったな。まあだからどうしたというわけでもないんだけれども……。

正直、クソ暑い日にうざったい制服に着替えて登校するのはうんざりするのには毎年の事だけれども、行かなければならないし、家のチャイムもすでに6、7回押されているので仕方なく制服に着替えて家の玄関のドアを開けると、よく見知った顔がそこにあつた。

新谷真心しんたにこころ、俺と可憐の幼馴染みの少女で、俺とは10数年の付き合いになる。ショートカットとたれ目が印象の、のほほんとした雰囲気がいっつの性格を現している。しかし外見はいい。少なくとも2、3人から告白された事はあるらしい。俺がそんな事を考えていると、ちよつと困惑した表情の真心が口を開いた。

「あゝ、光君やつと出てきた。8回もチャイム押したのに出てくる気配内からどうしちゃったのかと思つちやつたよ。」

相変わらず雰囲気だけでなく、声もボーっとしか感じの声である。

というか真心よ。お前そんなにチャイム鳴らすなよ。

そんな事を思っていると俺しか出て来ない事に、真心は困惑した表情から不安げな表情になって尋ねてきた。

「・・・ねえ、光君、可憐ちゃん、まだ帰ってきていないの？」

「・・・ああ、まだ帰ってきていない。」

「・・・心配じゃないの？連絡とかしていないの？」

心配じゃないのだと、こいつは何行つてやがる。俺は真心に、可憐に何度も携帯に電話したが繋がらない事を吐き捨てる様に言つと、「じゃ、可憐ちゃんが行つた場所に連絡してみたら？」と言つてきたがどこに行つたのか分らないので連絡しようが無いと伝えた。そうすると真心は驚いた表情になった。

「えっ?! 光君、可憐ちゃんが何処に行つたのか知らないの?! 私、可憐ちゃんから相談受けていたから光君もてつきり知つていると思つていたよ。」

ああっ!?! それはどういふ事か思いながら真心を問い詰めると、可憐は3週間前に来た手紙の事で、その指定した場所に行くかどうか、真心には相談したらしい。その事実<sup>こいつ</sup>に真心には相談して俺には相談してこなかったという事に少し凹んだ。真心は心配掛けさせたくなかつたんだよお〜というが兄として頼りないのかとまで思つてしまった。

とにかく俺の心情は別としてその時、真心は可憐に送られてきた手紙の内容を見せてもらい、何か合った時のためにコピーもしたそう<sup>う</sup>で、それを持っているそう<sup>う</sup>だ。それにしても、

「お前、よくその時、手紙をコピーしようなんて機転が利いたな。」

「うづん、可憐ちゃんに言われて」

・・・そうだよなあ、真心こころがそんな機転こころが利く頭なんか持っていないよな。それなのに学校の成績は上位の部類に入るなんてどういう事だ。まあ俺も可憐も何だかんだいって中の上ではあるけどさ。

まあそんな事よりも場所を知っているのならば教えてくれという、何でも伊豆諸島の孤島に建っている研究所に、可憐は行ったそのである。そこの名前を尋ねるが、うる覚えなのか名前が出てこない。埒が明かないので、その手紙を見せてくれと頼むと真心は「いいよ」と言っただけで自宅にとりに行ってくれた。

しかし手紙らしきモノを持って家から出てきた時、真心は何故か大慌ての表情になっていた。何事かと思っただけなら、

「光君、大変！学校遅刻しちゃうよ！早く行かなきゃ！」

と言っただけで手紙を持ったまま学校に向かって走り出した。おい真心、学校も分るけれどもせめて手紙を俺に渡してから行けよ。結局俺も真心を追う形で走る羽目になった。まあ、手紙は学校に着いてからでもいいだろう。

しかし後々で考えると、間違いなくこの手紙は俺いや俺たちにとっただけでもない戦慄と恐怖の世界への招待状だったのだ。この時の俺はその事に気付くはずもなかった。

ちなみに学校は懸命に走ったにも関わらず、若干遅刻となり真心共々、先生からお小言をもらってしまった。それと走って分ったがお互い暑さのせい、少しだらけた生活をしたためか体力が落ちていくみたいで今日明日にでも真心が、スタミナがつく料理を作ってくれると申し出た。

ちょっと嬉しく思ったのは内緒だ。

ファイル2 今はまだ朝の日常。(後書き)

日常の何気ない会話がほとんどの話でした。ちなみに誰が見ても分ると思いますが、新谷真心は、可憐同様メインヒロインの1人です。

美少女ゲームで言うところの個別ルートがあるヒロインですね。

### ファイル3 第2文学部(前書き)

今回も内容的には全然進んでいません。ちょっと説明っぽくなっ  
たかな。

### ファイル3 第2文学部

遅刻して先生からお小言をもらった後、教室で担任から毎年定番の言葉を聞いて解散となった。うちのクラスの担任はだらだらというタイプではないからそこ40分ぐらいで終わった。何しに学校来たんだろうと思わないでもなかったが、それはどうでも良いと斬り捨てて、本命である真心の持っている手紙のコピーを貰おうと、真心の席に行くと、「あれ？光君何か用？」なんてふざけた事を言ってきた。

真心は俺の心内を察したのか「嘘だよー」と言っ手紙を渡した。ちよつと言いたい事はあつたけれども、手紙は手に入れたので良しとしよう。

しかし教室では他のクラスメートなどもいて読みづらい。俺は部屋に行く事にした。

部室は俺達、3年の教室がある4階の奥の方にある部屋が使われているのだが、俺達の部は他の部と比べても使われている部屋がよい。かといって別に俺達が、部でそれなりの評価を受けるような事等をしたわけでもない。

その理由は何気に考えている間に部室の扉の前に来たので、扉を開けて何故か付いてきた真心と一緒に部屋に入ると、

「あら、お前達も来たのね。しかしお前達がこの”第2文学部”をそんなに大事にしているなんて思わなかったわ。」

と皮肉気うちの部長様が尊大に声を掛けてきた。そもそも”第2文学部”と名付けられている様に、この部とは別にちゃんとした文学部が、別に存在しておりそこはちゃんと活動しているのだが、この部はほとんど文学活動なんかしていない。しているとしたらた

まにオンライン小説や文化祭の出し物の時に小説を書くなどである。そんなわけでメンバーも俺、真心、可憐に2年の時に知り合った下級生の娘そして部長の5人というわけである。

しかしこの部長こそがこの”第2文学部”を現在でも存続させ、なおかつほとんど何の功績も出していないこの部に、分不相応な部室を使うことが出来る理由だった。そして学園の噂通りよく分らない人だ。

そもそもこの部長、桜乃静さくらのかずかは去年までこの学校の生徒会長もしており学校内ではそっち方面で有名だった。寧ろ第2文学部の部長も兼任しているなど校内でもほとんど知らないだろう。

もつともこの部長、桜乃静は外見もモデルみたいに綺麗だしスタイルも良い、身長も女性ではそれなりに高い上、長い黒髪とクールそうな印象の長身美麗の持ち主で、実家もこの当たりの地主でそれなりの規模の財閥の3女というお嬢様というわけなので、慕う人が出そうなものだが生憎とこの部長には当てはまらない。

何せ生徒会長時代着いたあだ名が”学園の影の支配者”で結構好き勝手していたらしい。それに時々、よく分らん行動を取る事も多く”学園の物体X”とも呼ばれていた。

しかしそんな部長も今年の3月に学校を卒業して地元の大学に合格して通っている筈のに、何故だか学校の制服を着て部室にいる事がそれなりにある。しかも何故か部長は今だこの人で登録されているし……。

「……部長も来ていたんですね。」

「あら、私はこの第2文学部の部長で、この学園の影の支配者なのよ。いるのは当然でしょう。」

とよく分らん理屈を返してきた。真心がその返答に「そーなのですかー部長」と返していたが、それを横で見ながら手紙を見ようかと思っただらもう1人、最後の部員である下級生で2年生の浅野愛あさのあいが

部室に入ってきた。

小柄な体格で長い髪をツインテールにしているという見慣れた姿が部室に入り、俺達の姿を見、次に部長の姿を確認し、それから誰かを探す様に周りを見渡すと少し首を傾げ、

「先輩、部長お久しぶりです。」

と片手を小さく上げて無表情で声を掛けてきた。相変わらず感情を表に出さない奴だ。こんな奴だから結構可愛いのに友人がほとんどいないらしい。数少ない友人の1人が同級生で、部が一緒の可憐というわけである。それ以前ってこの娘、友達なんていたのか？そもそもこの娘がこの部に入ったのって俺が2年の時、生徒会に部長のせいで在籍する羽目になっていた時に知り合っただよな。それでその後、第2文学部の部員として文化祭向けの作品を当時は結構真面目に考えて書いた作品をこの愛ちゃんが読んで気に入ってくれて部に入ったという経歴がある。

「ええ、浅野も来たという訳ね。これで可憐がいたら全員集合ね。天道と真心にも言っただけでもお前達がこの”第2文学部”を結構大事にしているとは思わなかったわ。」

そう言っただけ部長は肩を竦めた。まあ噂ではこの部も部長が好き勝手できる部屋を持ちたいという事で、その名目としてこの部を立ち上げたという話だからなあ。実際部活動なんていい加減だし。

「先輩、可憐はまだ帰ってきていないのですか？」

「そうね、それは私も気になるわね。」

愛ちゃんの言葉に部長も同意するとはちょっと以外に思った俺だったがそれは言葉に出さないで置く。

「ええ、まだ帰って来てないです。だから心配になってきたので可憐が行ったと思われる内容が書かれたこの手紙を今から読んでみようと思っていたんですが。」

「・・・それってお前は今まで可憐が何の用件で何処に行ったか分らないって言っている様に聞こえるのだけれども。」

「・・・ええまあ、そうです。」

俺のその言葉に部長は呆れた様な表情になった後、馬鹿を見るような目で俺を見た。まあ反論できないのは確かだけど、いい気分ではなかった。

「はあ、まあいいわ。じゃさつさと読みなさいな。別に私としては部長としていっておく事なんかないし。ああでも、2学期になったら文化祭があるので、また誰でもいいから適当に出し物を作っておいてね。」

それって部長、今回も俺達に放り投げる気満々ですな。

部長は言うともはや興味なしと言わんばかりに、他の部室には絶対置いていない携帯ゲーム機を手にとつて、同じく部室に不釣合いの高級そうなソファアに深く座り込み、ゲームをし始めた。

部長の態度は今更なので何も言わずに俺は手紙を広げ始めた。

後になって思えばこの手紙を部室で読まず、別の場所で読んでいれば部長や愛ちゃんをあの手紙と恐怖が支配する場所に巻き込む事は無かったかもしれない。・・・いやどうだろうか、どちらにする部長達にも相談する羽目になってしまつたので結局巻き込んでしまったのかもしれない。

そう考えたら運命の神の悪い悪戯に俺達はすでに引掛つていたのかもしれない。

### ファイル3 第2文学部（後書き）

今回の話から登場する2人もメインヒロインの1人です。光と真心に静と愛がこれから圧倒的な戦慄と恐怖の渦巻く場所に向かって行くと言つ訳です。

## ファイル4 可憐の行き先は生命進化推進興業所（前書き）

今回の話でようやく舞台となる研究所の名前が登場します。今回もあんまり進んでないな。

#### ファイル4 可憐の行き先は生命進化推進興業所

可憐に届いた手紙を広げた俺はどんな内容かを確認するために目を通すと驚愕した。何故なら手紙の内容は、

『 天道、旧姓天草可憐様、7月26日、午後14時に

伊豆諸島の1つである八丈小島にある生命進化推進興業所にお越し下さる様、

お待ち申しております。

追伸 御母堂である天草可奈博士がご存命であり、お会いしたいと願っている事を

記述しておきます。』

と記されていたからである。

正直、この手紙の内容はふざけているとしか思えないが、単なる悪戯と切り捨てる事が出来ないのは、可憐の旧姓を記している事や生命進化推進興業所という単語が載っていたからである。何故なら可憐の母親である天草可奈という人は、生物学の科学者で、生命進化推進興業所というところで亡くなったと生前親父から聞かされたことがあったからだ。当然可憐も知っているのです、その事に気付いたに違いない。

もう1つの手紙には家から生命進化推進興業所までの行き方が、詳しく記載されていた。幼子にも分るような内容はどうみても可憐を目的地に行かせたいというのが理解できた。

「なあ真心、可憐に送られてきた手紙はこれで全部なのか？」

「え？あ、うんそうみたいだよ。後はその場所までの通行費と思われるお金が入っていたって。」

通行費まで入っていたと言うことは、もう完全に当たりだろう。

それにしてもこの手紙の主は何の目的で可憐をこの生命進化推進興業所という場所に来させたかったのだろう。

「それにしても可憐ちゃんって昔の苗字は天草って言ったんだねえ。それにお母さんは天草可奈さんって言うんだあ。」

俺がそんな事を考えていたら真心が呑気な事をほざいたのだが、それに我関せずで携帯ゲームをしていた部長が反応した。

「天草可奈？・・・可憐の母親は天草可奈なの？」

「え？ええ、そうですよ。と言うか部長は天草可奈を知っているのですか？」

「まあ多少はね。生物学方面ではそれなりに有名人だったみたいだから。」

部長の言葉に俺はそこそこの驚きを感じていると、真心がお気楽そうな声で、

「じゃあ部長、この可憐ちゃんが向かったこの生命進化推進興業所というのはご存知ですか？」

と尋ねると部長は片眉を上げた。

「・・・可憐は生命進化推進興業所に行ったの？」

「そうみたいですよ。生命進化推進興業所に来て欲しいと書かれ

ていますから。」

「・・・その手紙の持ち主は絶対何か思惑がありそうね。」

そういって部長の知っている範囲内だが、その生命進化推進興業所について説明してくれた。それによると生命進化推進興業所というところは、文字通り生物の進化を調べ発展させるための研究をしている研究所であり、国内の大手の製薬会社の1つと、ヨーロッパに本社がある外資系の大手製薬会社が共同で出資しているが、国も若干融資しているそうなので半国営と言った感じの民間研究所だそうである。

「と言ってもこの外資の方は軍と一緒に生物兵器を研究しているのではないかという良からぬ噂のあるところなんだけれども・・・ね。」

部長の説明に俺達は成程と頷いた。部長はそしてと言って可憐の母親である天草可奈も、この生命進化推進興業所に勤めていたと説明したが、そこら辺は俺も聞いていたので驚きは無かったが、その次の部長の言葉には驚く事となってしまった。

「この天草可奈博士は、生命進化推進興業所で何かの発見をし、それに基づいたプロジェクトをしていたみたいなのだけれども、その過程で事故にあって亡くなったというのだけれども、実はこのプロジェクトを巡って内部でごたごたが起きて、それによって事故に見せかけて殺されたのではないかと言う噂もあったみたいよ。どちらにしろ生命進化推進興業所も色々と言及有り気で、可憐の母親である天草可奈の事故死もそういう噂がある。そんな所に天草可奈の娘である可憐が招かれるなんて、何か明確な目的があるのは間違いないでしょうね。」

部長の言葉に俺は改めて可憐に手紙が来た時に、内容を問わなかった事を後悔した。しかしその事を言ってももう意味が無いので、俺は考える事にしたのだった。

可憐の母親が死んだ場所であるいわくありげな研究所、生命進化推進興業所。この時の俺はこの研究所になんとも言えない不吉なものを感じたのだが、後になって思えばその感覚は間違いではなかった。

#### ファイル4 可憐の行き先は生命進化推進興業所（後書き）

次の話ぐらいで研究所に行こうという感じになります。そういう意味ではまだプロローグの後半ら編と言った感じですね。

ファイル5 可憐を追って俺達も。(前書き)

今回はちょっと話の流れが強引な気もしますが、まあこんなもんだと思いつつ読んでくれれば嬉しいです。

## ファイル5 可憐を追って俺達も。

俺はしばらくこれからどうするべきかを考えていたら、「先輩」と愛ちゃんが声を掛けてきた。

「まずはその生命進化推進興業所に、電話を掛けてみたらどうですか？それで可憐ちゃんを帰して貰える様交渉とかしてみたら。」

愛ちゃんのアイデアは俺としてもいい提案だったと思うので、さっそく電話を掛けてみようと思ったが電話番号が分らない。さてどうしようかと思い、何気なく部室の中を見回したら設置されているうちの部には不相应な最新版と思われるパソコンが目に入り、それで閃いた。

生命進化推進興業所をネットで検索したら電話番号や他にも情報が入るのではない、さっそく起動させてネットで検索してみると生命進化推進興業所のHPが出てきた。

それをクリックして開いてみると生命進化推進興業所の外観と思われる画像と共にいくつかの目次も出てきた。それらを開いてみたが、生命進化推進興業所の歴史とかしている研究の当たり障りの説明とかであまり面白いと思われないHPだった。しかし部長の言っていたように生物の進化を研究し、それで人類の更なる進化の手助けとなるように推進しているというのは確認はできた。

そして肝心の電話番号も記載されていたので、さっそくかけてみたのだが、

「何故出ない。」

すでに電話を掛けて10回はコールを鳴らしているのに出る気配が無い。それから20、30と待っても出なかったので止む無く、

俺は電話を切った。

「電話出なかったの？」

真心が訊ねてきたので、俺はがっくりした感じで頷くと

「それって可笑しいわね。普通なら出るはずなのに……。何かあったのかしら？」

部長が考えるような仕草で言ったが、正直俺はどうでもよかった。それと同時に何だかこんなにも厄介な事をしてくれたこの生命進化推進興業所に対して少しづつ怒りが湧き始め、可憐の心配も重なって1つの決心になった。その様子を察してか真心が声を掛けた。

「光君？どうかしたの？」

「……こうなったら決めた。」

「はい？」

「可憐を連れ戻しにこの生命進化推進興業所に行つて来る！」

俺の発言に真心も部長も愛ちゃんも驚いた表情になったが、部長はすぐにいささか呆れた表情になった。

「正気かしら天道？隣町に行くのではないのよ。」

「理解ってますよ部長！でもこのまま手を拱いていても仕方ないじゃないですか。なら場所が分っているのだから直接連れ戻しに行くのも方法の1つじゃないですか！」

「……まあ方法の1つであるのは確かだけれども。お前行くだけの資金持っているの？」

「ちゃんと持っていますよ。それに可憐を連れ戻す時に、生命進化推進興業所に迷惑料として交通費請求してやる！」

俺の言葉に部長は更に呆れた様だった。真心は「往復のお金なんて私、持ってない」なんて呟いていた。というか真心、お前付いて来る気だったのか。愛ちゃんは何とも言えない表情をしていた。

「部長、光君を行かせていいんですかあ？」

「部長、先輩の意志を尊重するのですか？」

「・・・いいも何も私がどうこう言う権利なんかないわ。でもかなり不安のも確かなのも事実だけれども・・・。」

部長は些か不安気な様子で言ったが、真心と愛ちゃんよ、お前らまで俺をそんな風に見ていたのか。ちよつと心外な気持ちだった。そこにしばし何か考えていた様子の部長が「そうね」と言った。その次の言葉は俺を驚かせるものだった。

「こうなったら私達も一緒に可憐を連れ戻しに行きましょうか。」

天道1人を行かせるのは些か不安なのは確かだし。行ったところで向こうがごねた場合、交渉なんてできなさそうだしね。」

「はあ?!、しかし部長は出せようだとしても真心や愛ちゃんの方はどうするつもりなんですか?!」

「ふふ、まあそれは問題は無いわ。うちの部に支払われている部費を結構貯め込んでいるから。それを使うわ。喜びなさい天道。お前の分も出してあげる。まあ学校側が何か行ってきたら部の課外活動で使ったて言えばいいしね。まあだからこそ真心や愛も連れて行くのだけでも。」

その言葉に真心は嬉しそうな表情をしており、愛ちゃんは無表情ながらを傾げながらも手をぱちぱちと拍手していた。その様子から部長の案に反対ではなさそうだった。いやそれ以前にうちの部にも部費って払われていたのか。全然知らなかった。相変わらず謎の多い

部長である。

その後は膳は急げと言わんばかりに、明日の昼の八丈島行き航空便の席が空いていたので、それを予約し俺達の航空代金も支払った。これで明日は生命進化推進興業所に行くのは確定となった。

まあ別にいいんだけどもさ。行くつもりだったから……。でも何か釈然としないものがあるのは何故だろう。

俺は明日行くための準備を、と言ってもさほど持っていく物などないが用意するために部屋を出て家路の帰路を歩きながらそんな事を思った。

こうして俺達は可憐を連れ戻すために、生命進化推進興業所に行く事になったのだが、この時俺達は知らなかった。すでに生命進化推進興業所はただの研究所でなく、圧倒的な戦慄と恐怖が支配する空間に成っている事を……。

そして俺達がそれを知る事になるのはもう目前まで迫っていた。

ファイル5 可憐を追って俺達も。(後書き)

これでプロローグは終了と言う感じかな。次から物語の本当のス  
タートと言った感じになります。

ファイル6 いざ出発と思ったら(前書き)

色々と忙しくてかなり間が空いてしまいました。ようやく第6話投稿です。

## ファイル6 いざ出発と思ったら

翌日である今日、俺達、第2文学部の面々は可憐を連れ戻すために、可憐が招かれた生命進化推進興業所に向かうため、まずは空港に行くために近くの駅で待ち合わせる事となったのだが、

「ねえねえ、光君似合う？」

と真心が普段は着ない様な結構お洒落な長いスカートと半そでのブラウスを着て白い大きな目の帽子を被って、俺にどうかと聞いてきたのだが、俺は非常に言いたかった。お前似合うのは認めるが、絶対旅行と勘違いしているだろうとツッコミたかった。

いきなりの真心の斜め上の心持に、些かテンションが下がった状態で、真心に適当に相槌を打って駅へと向かった。

「時間20分前に来るなんてなかなかいい心掛けね。天道」

早めに出たつもりなのに駅前に来るとすでに部長と愛ちゃんが待っていた。これにはちょっと驚いたが、2人の服装の方が俺としては驚いた。部長は生地が薄めの黒の少しフリフリがついたドレスのようなモノを着ているし、愛ちゃんはサクラ色の薄地の着物に裾がちよっと短い袴を着ているしで、どう見ても普段のイメージからかみ合わない服装である。そんな俺の考えなど部長が気にするはずも無く、真心の方を見て聞き捨てならない事を言った。

「あら真心、お前もちゃんと昨日3人で買いに行ったその服で来たのね。」

何ですと？昨日買いに行った？どういうことだ？そう思った俺は

真心に問いたただすと、昨日俺が部室を出てから3人で今日来て行く服を見に行こうと部長から提案されたらしい。ちなみにその服の代金も部費から出したらしい。いくらなんでも無茶苦茶じゃないですか部長。いやそれ以前に部長の中では旅行と認識されていますね。そうですか。

俺は正直、可憐を連れ戻すためにわざわざ遠方の生命進化推進興業所に行こうというのに、旅行気分が付いて来る部長達に、それなりに不快な気持ちになった。

「安心しなさいな天道、お前の分もちゃんと買っただよ。」

思っていた事が顔にでも出ていたのかあまりいい表情をしていなかったのだろう。それを部長は妙な方向で解釈した様だった。

全然違つと突っ込みたかったが言つても意味が無いと思つたのか、部長が肩に下げていたバックから光に見繕つたと思われる服を出してきた時、「ど、どうも」と言つて素直に受け取つた。

「じゃ、着替えてきて」

「はっ?」

受け取つてすぐの部長の突然の言葉に俺は思わず聞き返した。しかし部長は気にする風もなく言葉を続けた。

「せつかくお前のために購入しても、肝心のお前が着ないんじゃないじゃない。幸い時間に余裕はあるし、自宅に帰つて着替えてきなさいな。」

「え? いやしかし」

「しかしもかかしもないわ。着替えてきなさい天道。それとも私達を選んで金まで払つたのに着たくないなんていうのかしら?」

有無を言わせない部長の雰囲気には俺は「い、いえ」と頷くしかなかった。こうして俺は思わぬトラブルに家に変える羽目になった。行く前からこれではろくな事になりそうにないなと思ったが、行った先はまさにその通りだった。いやそんな生易しいものではなかった。

結局急いで家に帰ってきた俺は汗だくになったので、着替える前に水を被ってから着替えたのだが、白いYシャツに、生地薄いズボンだった。着替えてみると結構落ちて着いて普段よりも大人っぽくみえる。

そう思ったらこれはこれで悪くないと思ったのは部長達には内緒である。そして俺はまたみんなが待っている駅前に戻った。部長達は近くの喫茶店で優雅にお茶を飲んでいた。そこに俺の姿を見ると、

「わあ、光君も結構似合ってるね。」

「先輩もうまく会ったみたいですね。」

「まあ、イメージ通りね。悪くないわ。」

と言ってくれた。正直結構嬉しかったのは内緒である。まあ何はともあれ今度こそ俺達は生命進化推進興業所に向かうため、まずは空港に行くために改札口を通って電車に乗ったのだった。それから約50分、乗換えなどもして俺達は空港に辿り着いた。そのまま問題なく飛行機にも乗れ、いよいよ離陸したのだった。

待つてるよ可憐。必ず連れ戻すからな。そんな決意で俺はいたが、それでも若干旅行気分もあったかもしれない。行った先でもひよつとしたら生命進化推進興業所の相手ともめるかもしれないというものもあることはあったが、物凄いトンでもない事になるとは思っていなかった。

・・・でも生命進化推進興業所で待っていたのは想像もしていな

いともんでもない事態だった。そして可憐を連れ戻すと言う事はとてもなく過酷で困難な状況で行うことになると思ってもいなかった。

空の景色はそんな事を思わせる事など微塵も感じさせない青く綺麗な景色だった。

## ファイル6 いざ出発と思ったら（後書き）

話を進めようと思ったら、ちょっと頭によぎった事を書いたら、  
1話終わってしまった。

これではホラーじゃないじゃん。駄目じゃん我。  
でもようやく次で物語が本格的になるかな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9423x/>

---

EVOLUTION - 進化という名の暴走 -

2011年11月22日04時05分発行